
深い世界と小さなわたしの旅立ちの詩

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深い世界と小さなわたしの旅立ちの詩

【コード】

N9064A

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

詩です。人の手が加えられていない世界。ゼロの世界にわたしはひとり。

ここには、誰もいない。

ひんやりとした樹海。

木々は朝露で湿っている。

太陽が昇っている。

見事な青空が葉を照らす。

木漏れ日は暖かな…

木漏れ日は暖かな…

水の落ちる微かな音。

風そよぐ心地よい音。

わたしはゆっくりと足音を立てないように

わたしはゆっくりと耳を澄まして

もっともっと深くへ進む。

恐怖はない。

見上げればそこには青空があるから。

この目が見えなくなったら、それは恐怖だ。

青空と白雲を目に焼き付ける。

虫さえもないこの森で、生きているのはわたしと木々のみ。

呼吸する木はわたしに話しかける。

どこまでいくのですか。

わたしは微笑み、答えてやる。

暖かい場所へ。

乾いた木は、もう死んでいる。

夜は、いつの間にかきた。

青空の代わりに遠くの星がいくつも見える。

きらきら輝くあの光はもう数万年も前の光だったり、昨日の光だったり。

宇宙。そう、ここは宇宙の一部だ。

驚くほど広い世界に、自分がちっぽけに見えてしかたがない。

空の真ん中にある北極星に人は触れたことがない。

そう考えて眺めてたら、時間が止まってしまったような気がした。

筭星さえ止まって見える。

希望が消えてしまうときの力の弱さを感じる。

わたしは足元を見て、涙を溢した。

再びの青空。

あたり一面が湿っているのは、わたしの涙ではなくて、やっぱり朝露のせい。

ふいに勢いのある水の音がする。

いくつもの視点で目の前に現れた滝を眺める。

人工的に感じる水面は、青空をそのまま映し出す。

ひんやりと冷たい水。

滝つぼは深く、安らぎの色。

沈んでいく。沈んでいく。

これも、旅立ち。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9064a/>

深い世界と小さなわたしの旅立ちの詩

2010年12月29日02時23分発行